

運動・スポーツを通して未来を創造しようとする生徒の育成(2年次)

～スポーツとの多様な関わり方を思考させる方略の研究～

杉浦 広憲

Hironori SUGIURA

概要

1年次研究では、副題を「『自己と運動・スポーツとの関わり方』を思考させる方略の研究」とし、自己調整的な学習や他者との協働のプロセスを工夫して、自分の考えや気持ちを的確に伝えたり、様々な運動やスポーツに対して自分に合った関わり方を見つけることのできる生徒の育成を目指した。具体的には、単元のゴールを明確にした単元計画や、技能差・男女差を意図的に配置したグルーピングにより、多様な考え方が活発に交流されるとともに、単元の特性を伴った楽しさを実感させる授業を展開することができた。2年次研究では、前年度の学習や他領域・同領域の学習とのつながりや、将来を意識した実生活との関連付けを図った授業の工夫を通して、積極的に生活の中に運動やスポーツを取り入れようとする生徒の育成を目指す。

キーワード： つながり, QOLの向上, 自己調整, 多様性, 協働, 個々の特性

1. はじめに～研究の目的

今年度より新学習指導要領が施行され、各教科等においてその改定の趣旨に基づいた授業改善が求められている。5点にまとめられている改訂の基本方針のうち、育成を目指す資質・能力については「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくかという目的を自ら考え、自らの可能性を發揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすることが重要であること」と示されている。保健体育科においては、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」ということになる。

スポーツ庁では、スポーツ基本計画を通してスポーツ立国の実現を目指している。昨年度はオリンピック・パラリンピックの開催を軸として計画が前進していくはずだったが、新型コロナウイルスの影響により大会が中断している。併せて、人々の外出が制限され、学校が主体の各種大会はもちろん、プロスポーツの試合やスポーツイベントが軒並み中止となっている。そんな中、スポーツ庁による「スポーツの実施状況に関する世論調査^{*1}」によると、「1年前よりも運動をする頻度が増えた」と答えた成人の割合は18%程おり、その中でも「コロナウイルス感染症対策によって日常生活が変化したことで運動やスポーツをする頻度が増えた」と答えた人が36%程いたことがわかっている。また、運動やスポーツを実施する頻度が増えた人が実施している種目では、ウォーキング

やトレーニング、ランニングなどが多く、比較的手軽な運動を行う傾向にあると考えられる。一方で、「1年間で運動をしなかった」と答えた人は16%程おり、その中でも「今後も運動・スポーツをするつもりはない」と答えたいわゆる無関心層が13%程を占めている。このことから、一定数は運動やスポーツ、健康の保持増進等に興味を持っているが、仕事の忙しさやそもそもの運動・スポーツへの関心のなさが運動の実施率の妨げになっていることがわかる。その他、スポーツ実施率を向上させる行動計画^{*2}では、「体力や技能の程度、年齢や性別及び障害の有無等に関わらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方を共有できるようにする」等の指導を通して、運動やスポーツを実施する意欲を高めることを促進することを学校の教育上で求めている。

こういった我が国の状況と保健体育科の目標を踏まえたとき、「多様な運動の取り組み方や楽しみ方を身に付けさせること」や「生涯にわたって運動に親しもうとする態度を育てること」が中学校の保健体育科に求められるものと捉えることができる。よって、本校保健体育科では、単元計画や1単位の授業の工夫を通して、生涯にわたって多様な視点から運動を楽しむことのできる生徒の育成を目指すこととした。

2. 生徒の実態(1年次の成果と課題)

1年次研究では、質の高い学びに向かうために自己調整的な学習や協働に焦点を当てて研究を進めた。具体的には、単元のゴールをイメージさせ、ゴールに迫る

ためのパフォーマンス課題を設定することや、意図的なグルーピングによる協働場面を設定することで、自己の学習を適宜振り返りながら学習を進めたり、男女差を越えて運動の課題を解決させたりすることができた。

しかしながら、以下のような課題も見られた。

- ・運動が苦手な生徒や(学習内容によっては)男女差を気にする生徒にとって、協働場面は活動意欲を下げたり活動自体の妨げになることがある。
- ・生徒が効果的に知識や技能を活用したり、前年度までの学習と本単元との関連を明確にした単元計画が不可欠である。

以上のことから、どのような状況(単元や仲間など)でも積極的に仲間と関わり意欲的に活動できる協働の工夫や、生徒にとって学びの連続性がわかりやすい単元計画の工夫が必要であると考えている。

2. 1. 目指す生徒像

保健体育科では、以上の課題や保健体育科の目標を踏まえ、目指す生徒像を以下のように捉え直した。

- ・自他の特性を踏まえ、自他を尊重しながら意欲的にスポーツに関わることのできる生徒
- ・既習事項や将来の生活とのつながりを意識しながら学習に取り組むことのできる生徒

3. 研究主題及び副題

先にも述べたように、保健体育科の目指すところは「生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力」の育成である。その場限りの知識や技能を求めて授業を展開するのではなく、どの生徒も自分の状況に合わせて生涯にわたってスポーツに親しむことができるようにすることが私たちに求められる。

これまで述べてきたような国の施策や生徒の実態、保健体育科の役割を踏まえ、本校保健体育科の研究主題及び副題を以下のように設定した。

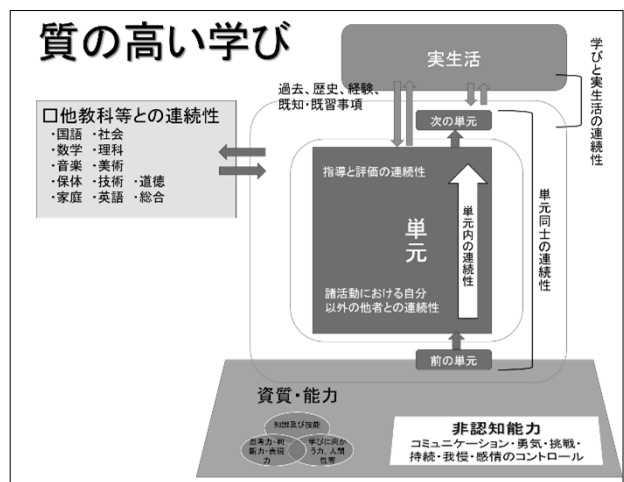
- 運動・スポーツを通して未来を創造しようとする生徒の育成(2年次)
～スポーツとの多様な関わり方を思考させる方略の研究～

4. 研究の内容と方法

本校の2年次研究においては、生徒の実態やこれからの時代の潮流を踏まえた「質の高い学び」に向かうために、様々な側面から「連続性」というものを考えること

が重要であると捉えている。

本校研究の構造図は以下である。

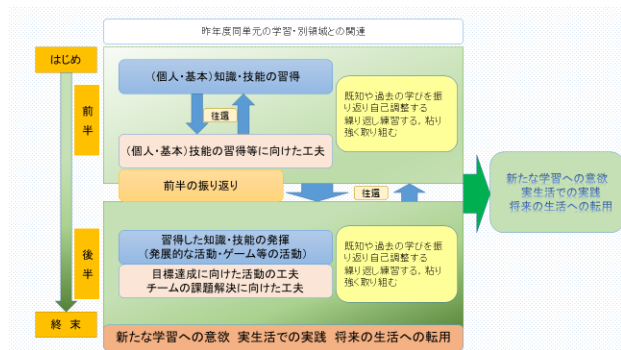


本校2年次研究の構造図

この中で、本校保健体育科では、特に「単元同士の連続性」、「単元内の連続性」及び「諸活動における自分以外の他者との連続性」に焦点を当てて実践研究を進めることとした。これらが、「2. 1.」で示した目指す生徒の育成に向かう上で特に重要な視点であると考えたためである。

4. 1. 自己調整を促す学習過程の工夫

学習指導要領の改訂の基本方針では、カリキュラム・マネジメントの推進が述べられており、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うことが求められるとしている^{*3}。特に、「深い学び」の視点については、見方・考え方を「習得・活用・探究」という学びの過程で働かせ、より質の高い深い学びにつなげることが重要である^{*4}。本校保健体育科では、前年度の研究において学習過程の工夫(主に課題設定)に取り組んできたが、今年度は前年度までの学習や他の単元とのつながりを重視した学習過程の工夫に取り組む。その内容を、次の構造図に示す。



本校保健体育科の学習過程の構造図

図のようなプロセスを意図的に組み込むことで、子供たちの自己調整が生じるものと考え。以下に、教師側の学習過程作成の流れを記す。

- ①生徒の実態に応じて単元の目標を設定する
- ②目標の達成に必要な知識・技能を精選する
- ③単元の冒頭で生徒に見通しをもたせる(目標の共有)
- ④個人や基本の知識を習得させる
- ⑤個人や基本の技能を高める練習をさせる(課題の発見と解決)
- ⑥個人や基本の知識・技能の習得具合を振り返らせる
- ⑦前半で習得した知識や技能を、発展的な活動やゲーム等に活用させる
- ⑧目標を達成するための課題を見付け、解決させる
- ⑨発表やリーグ戦等を行う

①～⑨の中で、既習内容や他教科での学びを適宜つなげていきたい。例えば、⑤で体力的な課題が見つかった生徒は、体づくり運動で学んだことを生かして練習することが可能である。また、⑦～⑧では単元の後半で目標を達成する間近であり、前半で学んだ知識や高まった技能を発揮する場面である。ここでは、前半の学びを適宜振り返ったり、さらに必要な知識や技能を習得しようとする自己調整が働くと考えている。

4. 2. 自他を尊重させる協働場面の工夫

前年度の研究では、課題の解決を促すために男女差や技能差を踏まえて意図的にグルーピングを行った。生徒たちは多様な他者との関わりの中で学ぶ意義を実感していた。ただ、事後アンケートから、一部の生徒や学習内容によっては協働場面が学習の妨げになりかねないことがわかった。そこで、性別や体力などが異なる他者が共に学びを深めていくために、保健体育の見方・考え方を生かした協働場面を設定する。「する・見る・支える・知る」といった多様な関わり方を通して、生涯にわたってスポーツに親しむことができるようにすることを踏まえ、生徒の多様性を重視したグループ活動の計画立案を生徒に行わせる。単元のゴールは設定しているが、そこに向かう道筋は生徒の実態(技能、体力、性別、趣向等)に応じて一人一人異なる。それらをグループ内で共有した上で、グループ独自の取り組み方を考えさせたい。

例えば、ある程度多様な集団となるよう意図的にグルーピングをした上で、「特性カード」を使ってメンバーの特性を洗い出す。その特性に応じた役割分担や練習内容を考え、学習を進めていく。

【教師から提示する特性】

- ・運動の不得手 ・体力 ・体格 ・知識
- ・運動(その単元)の好き嫌い
- ・本人の思いや願い(健康志向、競技志向など)

【考えられる生徒の思考】

- ・分析が得意 ・誉め上手 ・リーダーシップ

【役割】

- ・リーダー ・準備運動 ・撮影 ・練習指示
- ・用具 ・振り返り集約(クロムブック使用)

こういった活動を通して、多様なスポーツの関わり方を身に付けさせていくことができるものと考えている。

5. 実践と考察

「E 球技(バドミントン・ネット型)」

5. 1. 単元の構想

第2学年の生徒について、バドミントンやネット型スポーツに関わるアンケートを実施したところ、次のような結果が出ている。

バドミントンをプレイしたことがある	81%
バドミントンのゲームを見たことがある	85%

《「グーグルフォーム使用「はい・いいえ」の2件法で回答》

アンケートの結果から、バドミントンを経験したことがある生徒や、バドミントンのゲームを見たことがある生徒は全体の8割程度いることがわかった。ゲームを見る機会については、テレビでオリンピックを見た生徒がほとんどを占めていた。また、バドミントンと似ているスポーツを挙げさせたところ、テニスや卓球と答えた生徒が多かった。これは、ラケットスポーツであることや本校にソフトテニス部があること、オリンピックのゲームをテレビで見た生徒が多かったことが影響していると考えられる。

バドミントンは、バレーボールやテニスと同じネット型スポーツとして位置付けられている。相手コートに球(シャトル)を落とすことで得点することができるが、ボールとシャトルの落下速度や重さの違い、人数やコートの広さの違いにより、求められる体力や戦術の立て方が変わってくる。

この単元の学習では、ラリーを続けることの楽しさを味わわせたい。オープンスペースを意識して攻防することについて考えさせた。オープンスペースを狙うためには様々なショットを使い分ける必要があり、オープンスペースを守るためには定位置に戻る必要があるといったことを理解させた。また、ネット型のバレーボールを1学年で学習していること、バドミントン部やソフトテニス部

に所属している生徒が一定数いることを踏まえ、既習の内容や既存の経験が結びつくように授業を進めた。

以上のような単元の目標と、単元の特性や生徒の実態を踏まえ、以下のような工夫を試みた。

- ①自己調整を促す単元計画の工夫
- ②他の単元とのつながりを意識した指導の工夫

4. 1で述べた通り、単元の目標に向かう過程で生徒たちが主体的に学習に取り組んでいくためには、知識や技能を学ぶ必要を実感させたり、自分で考えたことを発揮させる機会を設定する必要がある。また、球技は学習指導要領において「ネット型」「ゴール型」「ベースボール型」に分類されているが、主体的な学びを促すための工夫として、それぞれの型の特性に気付かせたり考えさせたりする活動を設定した。以下の指導計画に基づいて行った実践の詳細を5. 2で述べる。

時	学習内容	評価規準
1~2	○オリエンテーション ○ネットの張り方 ○ラケットの握り方・振り方 【テニスとのつながり】【工夫①・②】	知
3~7 (本時7)	○試しのゲーム ○ショットの種類と練習(クリアー, ドロップ, ヘアピン) ○バドミントンの特性(他のネット型スポーツとの比較) 【テニスやバレーボールとのつながり】 ☆中間振り返りと個人の課題の把握 【工夫①・②】	知 思 態
8~13	○課題別練習 ○ルールを変えたゲーム【工夫①・②】	知 思 態

5. 2. 授業の実際

前述の通り、多くの生徒はバドミントンを経験しているが、知識や技能の程度に差があることが予想された。そこで、本単元の1時間目では、「ネット型スポーツの特性を捉える」というねらいを示しつつ、ネットの張り方や道具(とその部位)の名称、ラケットの握り方などの学習を行った。(指導者として授業の意図を示しながら、どの生徒(運動が苦手、バドミントンは初めてなど)も目標を達成できるように指導することが肝要である。)また、シャトルの独特な飛び方に慣れるため、単元の中盤までシャトルリフティング等を行った。具体的な内容は次のとおりである。

【シャトルリフティング内容】

- フォア・バック(各20~50回)
- フォアとバックを交互(各20~30回)
- シャトルキャッチ(フォア・バック)
- 歩きながらシャトルリフティング
- ペアでシャトル交換
- 背面打ち

この際、床に落ちたシャトルはできるだけラケットを使って拾い上げることも指導した。

また、安全上の留意点としては、次の内容を指導した。

- 周囲の確認(特に後ろ)
- 支柱を抜いた後に床の蓋を閉めること

1時間目の後半からは、ラケットの持ち方や二つのストロークについて学習し、ペアでラリーを行った。持ち方については特に指定していないが、次のような説明を踏まえて生徒自身で選んでいる。

【ウエスタングリップの握り方と特徴】

- ・ラケットを床に置いた状態でグリップを上から握る
- ・シャトルに対して面を作りやすいので、初心者はシャトルを打ち返しやすい

【イースタングリップの握り方と特徴】

- ・ラケットを立てた状態でグリップを上から握る
- ・力が伝わりやすいため、強い球を打つことができる

ラケットの扱いに慣れていない生徒はなかなかラリーが続かないが、バドミントン部はもちろん、テニス部の生徒においては、ラリーを楽しんでいる様子が見られた。

3時間目は、オーバーヘッドストロークとアンダーハンドストロークについて説明し、試しのゲームを行った。ゲームのルールについては何も設定せず、ネットを挟んでシャトルを打ち、自分のコートにシャトルを落としたり、ネットに引っかけてしまっただけではいけない、といった形でゲームを行った。ルールを設定しない理由は、「何がよくて何がよくないのかいまいちわからない」という疑問を生徒にもたせるためである。この疑問は、ラケットやシャトルの扱いに慣れてきた頃に、ルールの必要性を実感させるために重要と考えるためである。なお、この時間以降については、学習したことを発揮する機会を確保するため、毎時間ゲームを行った。

4時間目には、前時の疑問に応えるべく、ゲームのルールについて学習している。説明したルールは次の通りである。

【ゲームのルール】

- サービスでスタートする
- コートは縦長のハーフコートとし、すべての外側のラインを使用する
- ライン上にシャトルが落ちた場合は「イン」
- サービスは、相手コートのショートサービスラインを越えなければならない
- 5点先取で勝利

なお、今回は生徒の実態を踏まえて縦長のハーフコートでゲームを行っている。シングルスゲームを通常のルールで行うと、簡単にシャトルが落ちてしまい、ラリーを楽しむことができる生徒が少なくなると考えたためである。また、コートが縦長であるため、自然と前後に動くことが多くなることも、本実践では重要となる。

この後、「クリア」の打ち方、5・6時間目には「ドロップ」と「ヘアピン」の打ち方について学習した。なお、いずれのクラスにおいてもバドミントン部や経験者がいたため、そういった生徒を模範として、実際にシャトルを打っているところを生徒たちに見せている。

7時間目は、本単元の中間に位置する時間で、バドミントンを含むこれまでの学習や、経験したことのあるネット型スポーツを基に、ねらいでもある「ネット型スポーツの特性」について考えさせた。特に気付かせたかった点は、次のとおりである。

- 相手コートにシャトル(球)を落とせばよい
- 相手のいる位置に応じてショットを使い分ける
- 打った後に、相手の攻撃に備えることも大切

ネット型スポーツの特性をしっかりと考えさせるため、昨年度のバレーボールの授業や部活動、オリンピックなどを想起させながら「バドミントンと似ているスポーツ」「そのスポーツとバドミントンとの共通点・相違点」について考えさせた。その上で、コートの画像を映しながら「相手のいる場所によってどこをどのように狙ったらよいか」ということを確認した。生徒たちは、前時までの学習を振り返りながら「オープンスペース」の場所に応じて各ショットを使い分けることに気付いていた。また、シャトルを打ったら相手も打ち返してくることも説明し、攻撃後すぐに相手の攻撃に備える必要性に気付かせた。このやりとりで考えたことと、これまでの学習を踏まえ、学習カードを用いて授業全体の目標に対する自分の課題を明確にさせた。以下は生徒の書いた学習カードの一部である。

令和3年度

保健体育

バドミントンを楽しもう！ ～「ネット型スポーツ」の特性を捉えて～

2年 組 番名前

①よりよくゲームを進めるために必要なことは何だろう。

・相手のいる位置に応じて打ち分ける
・相手のいる位置に応じて打ち分ける
・相手のいる位置に応じて打ち分ける
・相手のいる位置に応じて打ち分ける

・低いシャトルを打つ方が有利である
・相手にボールを打ち返す
・相手にボールを打ち返す
・相手にボールを打ち返す

選択	基礎	ロケットの持ち方・グリップの握り方の練習	ロケットの握り方の練習
	基本技	ロケットのリフティング	ラリーを続ける
自由記述	自由記述	ロケットを打つ練習	ロケットを打つ練習
	自由記述	ロケットを打つ練習	ロケットを打つ練習

8～10時間目は、課題を解決するための時間で、自己の課題に応じた練習内容を選んだり、インターネットを用いて練習方法や各ショットのポイントを調べたりして各々で練習を行った。また、10時間目には、11時間目以降のリーグ戦に向けて、「グループ分け」を行っている。グループは「がっちりグループ(上手な人と対戦したい、激しく動いて勝ちたい)」「まったりグループ(勝つことよりもプレイを楽しみたい、自分のペースで学んだことを発揮したい)」の2つを設定し、生徒それぞれの実態や思考に合わせて選択できるようにした。

11～13時間目は、学習したことを発揮するリーグ戦を行った。11時間目には審判の仕方について学習し、各グループごとに生徒同士でリーグ戦を進行できるようにしている。また、試合の結果の書き方も学習した。

リーグ戦終了後には、学習カードを用いて振り返りを行った。以下は実際の学習カードである。

□練習やゲームの振り返り(課題に対してどのような練習をしたのか、またその成果を記入)

日付	感想	授業の振り返り	次回に向けて
10/25	面白い 楽しい	ドロップの感覚を少し 相手のいる場所、先に打ち返さないと 相手のいる場所、先に打ち返さないと	高くて速いボールを 打ち返す練習をする この練習をする
10/27	面白い 達成感 楽しい	練習を頑張る 前回はできなかった 前回はできなかった	練習を頑張る 前回はできなかった 前回はできなかった
10/29	面白い 楽しい 達成感	打つ時のシャトルの打ち方 ミスも減った感じが良かった ミスも減った感じが良かった	より速く打つ練習 シャトルを打つ練習 シャトルを打つ練習

★

うまくなったと思う。→ 相手のいる場所、足踏を覚えたから、相手ボールを返すと
相手のいる場所、足踏を覚えたから、相手ボールを返すと
相手のいる場所、足踏を覚えたから、相手ボールを返すと
相手のいる場所、足踏を覚えたから、相手ボールを返すと

この学習カードを記入した生徒は運動部活動には入っておらず、体力も本校では低い方である。そのような生徒にあっても、「疲れた、暑い、嬉しい」などの感想を書いていたり、ネット型スポーツの特性を理解した上で見直しをもって練習やゲームに取り組んだりしていたこ

とがわかる。また、単元末に書かせた振り返りでは、身に付けた知識やネット型スポーツの特性に係る考え方、そして高めた技能を生かしてプレイできたことが書かれていたり(記述前半)、自分の実態に応じて自分で考えながら学習に取り組んだこと(記述後半)がうかがえる。他にも、以下のような振り返りが見られた。

- ・相手の位置や前のシャトルと次に自分が打つべきシャトルが大きくかかわっていることがわかり、たくさんやるにつれてその一連の流れがとても楽しく感じられました。また、最初のほうはただクリヤーをうまくやろうと頑張っていたけれど、効果的にドロップやヘアピンを取り入れると点につながるため、それらを使えるようになったところが成長できたと思います。
- ・初めはラケットで打つことすらできませんでしたが、やっていくうちにコツをつかみ、ラリーが続くようになりました。自分ではかなり上達したと思います。ネット型スポーツということで、ネットがあるからこそ飛ばす高さや距離が大事になってくると思いました。また、1対1でやるからこそ相手のシャトルに臨機応変に対応することが大事だと思いました。

バドミントンの特性を理解し、バドミントンの楽しさを見いだしていることや、苦手意識をもっているも成長を実感していることが読み取れる。

このように、本単元の実践を通して、目指す生徒像に迫ることができたものと考えます。

6. 今年次研究の成果と課題

本校保健体育科では、今次研究の主題を「運動・スポーツを通して未来を創造しようとする生徒の育成」と掲げて研究を進めてきた。

本校では、これまで2年次研究について述べてきたが、以下に本研究の成果と課題、および今後の展望を述べる。

6. 1. 研究の成果

本校保健体育科の2年次研究では、副主題を「スポーツとの多様な関わり方を思考させる方略の研究」とし、自他の特性を踏まえ、自他を尊重しながら意欲的にスポーツに関わる生徒、および既習事項や将来の生活とのつながりを意識しながら学習に取り組むことができる生徒の育成を目指した。

保健体育科の目標や見方・考え方を踏まえ、生徒が自己の学びを振り返ったり、考えたことを実践したりする

時間を設定するなど、学習過程を工夫したことにより、生徒が個々に学びを深め、主体的に学習に向かう姿が見られたものと実感している。また、毎時間「感想」を書かせてきたが、「楽しい」「疲れた」「暑い」「達成感」など、授業に主体的に取り組んだからこそ出てくる生徒たちの気持ちが非常に多かったことも成果と言えよう。さらに、「男子と一緒にやれたことが楽しかった」「友達と協力して練習したからできることが増えた」など、仲間とのつながりについて実感を伴った振り返りをしている生徒も多かった。

このように、多くの生徒が多様な視点からバドミントンを楽しんでいる様子から、スポーツの特性に着目し、知識や技術を身に付けたり技能を高めたりする必要性を実感させることや、同じネット型スポーツとの共通点を見いださせること、そして仲間との関わりを意識した授業づくりを行うことで、スポーツの楽しさや奥深さに気付かせ、主体的な学びを促すことができたものと考えている。

6. 2. 研究の課題と今後の展望

実践の結果や授業・単元の計画の反省、そして生徒の実態(アンケートによる)から、次のような課題も見えている。

①「協働場面」の設定の仕方

本実践では、自他の特性を踏まえた協働場面を設定することが難しかった。これは、授業で扱う運動・スポーツの特性や生徒の実態(体力、知識の理解、発達段階、学級や学年の様子など)を踏まえて単元計画を作成できなかったことが原因であると考えられる。発達段階や生徒(場合によっては学級や学年)の実態を踏まえ、「学びに向かう力・人間性」を育むため具体的に指導する内容を明確にする必要があると考える。ただ、「協働」の効果については一定の成果は得られているので、単元の特性から協働の効果进行分析して授業改善を図ることはできるだろう。

②「必要感」を「実践」につなげる手立て

第3学年を対象に、冬休み中の運動の実践等についてアンケートを実施した。結果の一部を掲載する。

冬休み中、運動をしていた	60%
将来、運動やスポーツは必要だ	98%

《ゲーグルフォーム使用「はい・いいえ」の2件法で回答》

運動やスポーツの必要性を実感しているにもかかわらず、冬休み中に運動やスポーツをしていた生徒は6割に留まっている。運動をしていなかった生徒(40%)に対してその理由を問うと、「時間がない(75%)」「めんどうだ(36%)」「場所がない(30%)」という回答が得られた。また、受験勉強で忙しいことや、積雪といった北国特有の環境が背景にあることもわかった。

一方、運動をしていた生徒に運動の内容を問うたところ

ろ、「ランニング」「筋力トレーニング」「ストレッチ」の回答が多かった。これらは、一人で実践できることや場所を選ばないものであり、「1.」で述べた「コロナ禍で運動を実施するようになった人」が行っている運動と同じような手軽な運動と言える。また、「将来しようと思う運動やスポーツ」についても同様の回答であった。これらのことから、様々な運動やスポーツの「楽しみ方」や実践する「機会」について、現在や未来の生活を想定したより広い理解の必要性を実感している。

③個別最適な学び・協働的な学びの充実

令和3年の中央教育審議会の答申^{*5}では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められるとされている。具体的には、ICTを活用することにより、個々の家庭の経済状況に左右されることなく子供たちに必要な力を育んでいくこと、生徒一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出していくようにすることなどが示されている。

本校保健体育科では、生徒に配付された ICT 端末等を利用してさまざまな実践を行っているが、教材の視覚化、宣伝的な知識の確認、生徒の思考の収集とフィードバックなど、即時性の高い利用の仕方については、その効果を明確にした上での確に指導計画の改善に反映させていきたい。

また、協働的な学びにおいても、これまで通り一人一人のよさを重視した指導を念頭に置いていくが、各領域や単元の特性に応じて、一人一人のよさがどのように生かされ、一人一人の考えがどのように組み合わせられていくのかを予測し、質の高い学びを実践していかなければならないと考えている。

学習指導にあたっては、生徒が学ぶ意義や意味、そして各教科等の目標を常々意識しなければならない。保健体育科の授業は、ただ単に技術を身に付け、体力の高い者が楽しむものであってはならない。生徒の実態に合わせて運動やスポーツの楽しさや必要性を実感させることが、生涯にわたって豊かなスポーツライフを自ら送ろうとする人間の育成につながるものと確信している。そして、運動やスポーツを人生の楽しみの一つとしたり、健康の保持増進を図ろうとしたりすることが、QOL の向上につながっていく。さらには、コロナ禍のような予測困難な時代においても、生き生きと生活できる世界の創造につなげていくこともできるのではないかと考えている。

注釈

*1 スポーツ庁「スポーツ審議会健康スポーツ部会(第14回)」資料 2-1 による。

*2 スポーツ庁「スポーツ審議会健康スポーツ部会(第14回)」

において、「スポーツ実施率を向上させる行動計画」の進捗状況が公開されている。

*3 中学校学習指導要領解説総則編 P5

*4 中学校学習指導要領解説保健体育編 P230

*5 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』令和3年1月26日中央教育審議会答申

参考文献・論文

(1)文部科学省:スポーツ庁.「第2期スポーツ基本計画」

(2)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(65)」

(3)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(66)」

(4)北海道教育大学附属旭川中学校.「研究紀要(67)」

(5)西岡加名恵/石井英真.「教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価」.日本標準.2019

(6)岡出美則/友添秀則/岩田靖編著.『体育科教育学入門三訂版』.大修館書店